

5

全現 B B  
総振文・  
A  
語歴代典  
中 國 理 中

教育学部  
教育学・経営学専攻  
経済学

令和3年度入学試験問題

解答紙

(4枚のうち1枚目)

受験番号

--	--	--	--	--

5

受験番号

--	--	--	--	--

一 (60点)

<p>問1 原初の人間にとって神でもある野生動物としての鹿の身振りなどを模倣しながら、精霊たちの住む領域へと入り込み、神や精霊と交流し、世界を蘇らせる所作のこと。 旧石器時代の人類は、内臓感覚を自らが入り込む洞窟へと外化し、その洞窟の壁面をみずからの生命体としての記憶を刻印していく場として了解したということ。</p>	<p>問2 海の民が、全身体的な感覚を通じて星の配置を読み取り、それを自らの方向感覚に投影したり、占星術師が、天体運動を自らの身体や世界像と結びつけたりすること。</p>	<p>問3 文字以前の人間が身体感覚によって自然界を模倣することとで文化を創造してきたことが、人間の幼少時の模倣的想像力を用いた自在な模倣遊戯の中で繰り返されているということ。</p>	<p>問4 擬声語や擬態語の中に色濃く残されている模倣的な肉体的・物質性や、手で書かれた文字の中に潜在する身体的模倣の能力のこと。</p>	<p>問5 現代社会がデジタル化し、人類が自己の身体や天体の星や自然を模倣することで文化を創造してきた身体的な模倣の感覚が失われ、文字が情報伝達のための記号的符牒にすぎなくなっているから。</p>
---	---	--	---	--

採点

--	--

6

令和3年度入試問題  
国語代  
典  
A  
総論文  
B  
A  
B

令和3年度入試問題

解 紙

(4枚のうち2枚目)

受験番号				
------	--	--	--	--

6

受験番号

--	--	--	--	--

二 (60点)

採点

--	--

問1	動物とは他者に動かされるのではなく、ひとりで動くものことであり、生きている間つねに身体が動いている人間は、まさに「動物」と言えるということ。
問2	人間に似たロボットを作ろうとして人工筋肉を用いて実現させた、何もしていないときの人間に起こるかすかな動きは、外見的な類似性よりも、ロボットに人間らしさを与えるということ。
問3	肉眼では見えないが、生体はこれを積極的に活用して僅かなエネルギー消費で生存している、分子レベルでの生体のゆらぎ運動のこと。
問4	何もしていないときの人間に起こるかすかな動きを実現できたアンドロイドが、それを前にした人間に、自分とそれとの間に社会的な関係が生じたと感じさせるから。
問5	人間のかすかな動きを実現できたアンドロイドが、それに対面した人間の目をそらさせるばかりか、人間が触れることまでもためらわせるところからわかるように、目の前の対象がモノではなく本物の人間かどうかを判定する根拠が、対面する人間とその間に社会的な関係や倫理性が生じたかどうかで考えられているということ。
問6	対面的な状況においてロボットが人間らしく見えるには、〈人間〉を感じさせる最少の要素である目の動きがあればよいのではないかという、人間に似たロボットを作ろうとしてきた石黒の問題意識。

7

国語現代文 A  
国語現代文 B

教育学部  
経済・経営学科

令和3年度入学試験問題  
解答紙  
(4枚のうち3枚目)

受験番号

7

受験番号

三 (9点)

採点

問6	問5		問4	問3	問2	問1		
	イ	ア	並外れた悪童である福足君が、親の言うことをきいてきちんと舞うはずがないと思っただよ。	父兼家の六十歳の祝いの場で福足君に舞を舞わせようとして、あれこれ苦心したのに、当日になって福足君が、舞台の上で舞いたくないとだだをこね、髪をかきむしり、衣装を引き裂いたことが原因で、茫然自失の状態となった。	下二段動詞「かる」未然形＋尊敬の助動詞「さす」連用形＋四段動詞「たまふ」連用形＋完了の助動詞「ぬ」連用形＋過去の原因推量の助動詞「けむ」連体形	③	②	①
		イ				父大臣は言うまでもなく、他人でさえ、むやみに感動し申し上げた。 道隆の、舞台上に上り、福足君を腰にひきつけ自ら舞うことで、福足君の恥を隠し、父兼家の祝いの場を盛り上げるといふ、人に対して情け深くふるまう態度。	我慢でさず	教え申し上げるが
イ ↓ オ ↓ ウ								

8

合現B  
総義文・  
A  
言語代典  
國現古

教育部  
文学部  
文学  
経済・経営学  
学

令和3年度入学試験問題  
解 答 紙  
(4枚のうち4枚目)

受験番号

8

受験番号

四 (9点)

問6	問5		問4	問3		問2		問1	
	③	②		②	①	⑤	②	②	①
(イ) (エ) (ク)	つひに (い)	より	(オ)	書物を著す人が精神と体力を注いだ労力に比べると	方 <sub>下</sub> 其用 <sub>二</sub> 心与 <sub>レ</sub> 力之 <sub>上</sub> 勞	けだしかくのごとし	ひやくにいちにもそんなぜず (ギ)	著書之士	そのひとあげてかぞふべからず。 (ウ)
	④	①							
	それ	またなんぞ							

採点